ジャンボ君とのモチつき大会

近年、一般家庭ではモチつきを行う家庭が少く、実際に見ることが出来なくなって、めずらしい行事となってまいりました。

今では、お菓子屋さんなどで販売されているので、いつでも食べることができ、家庭ではモチつきをしなくてもすむ様になって、ウスや　キネ等は　物置の奥に、しまいこんで使用する事がなく、モチは　一定の人達、例えば、お米屋さん、とか、お菓子屋さん、にて大量に注文を受けて作る様になって来ました。

お正月に、モチつきは欠かすことの出来ない行事ですが、何故この様な行事が行われるのかを勉強し、今は少くなったこの行事を実際に体験しようと、昨年12月に、動物友の会の月例会はモチつき大会を行いましたので、お知らせしたいと思います。

シャチ、イルカ、ショープール、ステージに、2ケのウスを用意し、友の会々員約60名が、かわる　がわる、キネをふり上げて、ペッタン、ペッタン、キネの音高らかに初まると、アメリカ生まれのジャンボ君、何事が初まったのかと、ふしぎそうにプールからのぞいて見ていた　ジャンボ君にしても、こんな光景は初めて、ジャンボ君が日本の鴨川シーワールドに来て3年になったが、初めて見るもちつきに、おどろいていました。

しかし楽しそうに、ペッタン、ペッタン、やっている様子を何度かのぞいていたジャンボ君、これはおもしろいとばかり、プールの中でジャンプを初めた。800キロの体でジャンプするのですから、水しぶきがウスの中にまで入って来る始末、塩からいモチが出来上るかも知れないでもつき上ったモチを皆んなで食べた様子では、塩味もちょっぴりあっておいしかったのであろう。口のまわりはキナ粉だらけにした顔、キナ粉か顔かわからない人もいた。それを見ていたジャンボ君、調子をあわせる音頭をとったのはこの僕だ！皆んながおいしそうに食べて僕にくれないとは何事かとばかりに口にふくんだ水をひっかけて来た。「ジャンボ君のはこの次だよ」と２回目が始まった。今度は僕も食べられる‼とばかり一生懸命音頭とり、ペッタン、ペッタン、ドボン、ドボン………。

次から次へまるめる手つきも、形のいいもの、笑っている様な形のもの、四角ばった形のもの、いろいろ様々な、おそないが出来上った。ジャンボ君のおそないは体も大きいのでやはり大きいのを作ってくれた様だ。これで安心したのかジャンボ君、僕のは一番大きいぞ‼とばかり、大きくジャンプし大喜び………。

おモチは長く保存出来る食料として農家の人達に貴重な食料であり、又雪国の地方にとっては冬の間雪のため作物が出来ず、お米を加工し雪が消えるまでの間食に欠く事が出来ない食料である。と何かの本で読んだことがあり、雪国の農家では、多量のおモチをつくといわれております。又おモチは円く治める事により祝事のお供え物にするともいわれております。

ジャンボ君も今年は気分そうかいな正月を迎え元気なショーをごらんにいれております。

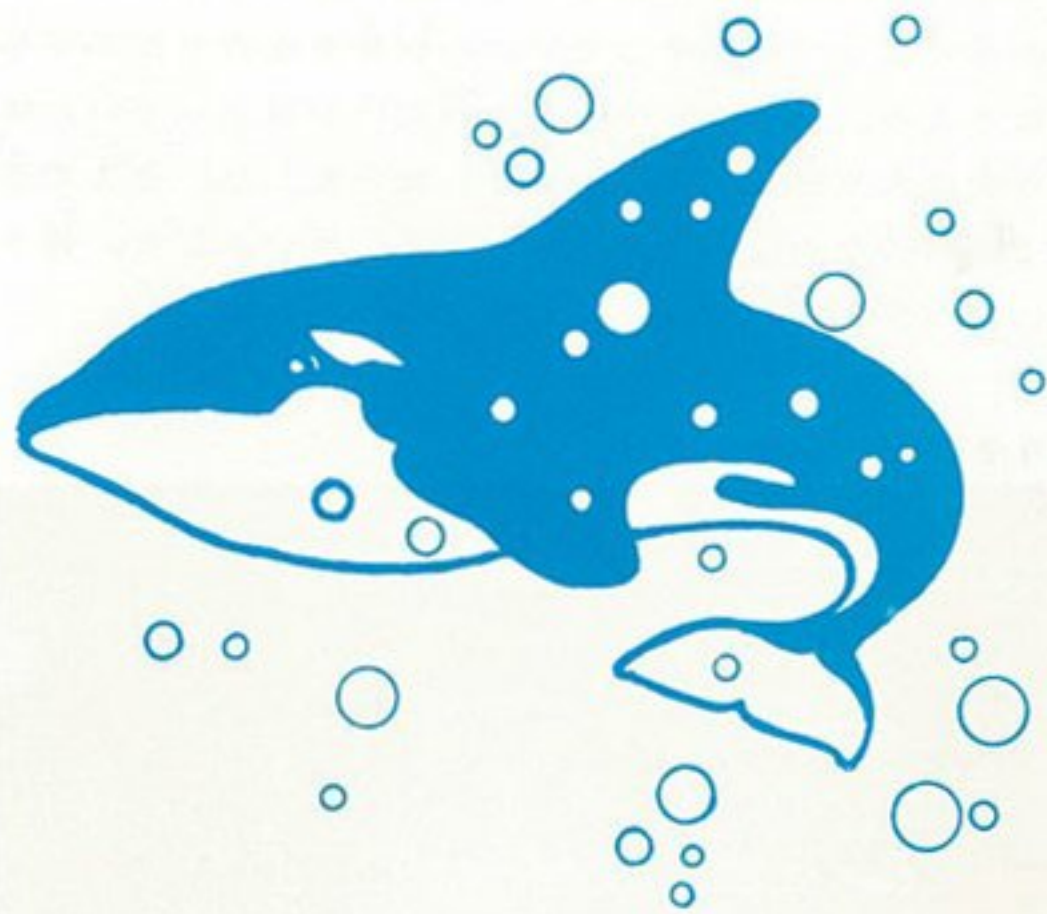
〔記者〕ジャンボ君のガールフレンド、チャピー

記者のことば

わたしも、ジャンボ君と一緒にアメリカからこの鴨川シーワールドに来て初めておモチつきを見ました。係員のお兄さんにいろいろ聞きながら書いて見ました。いろいろ教えていただいて勉強になり、楽しい一日でした。

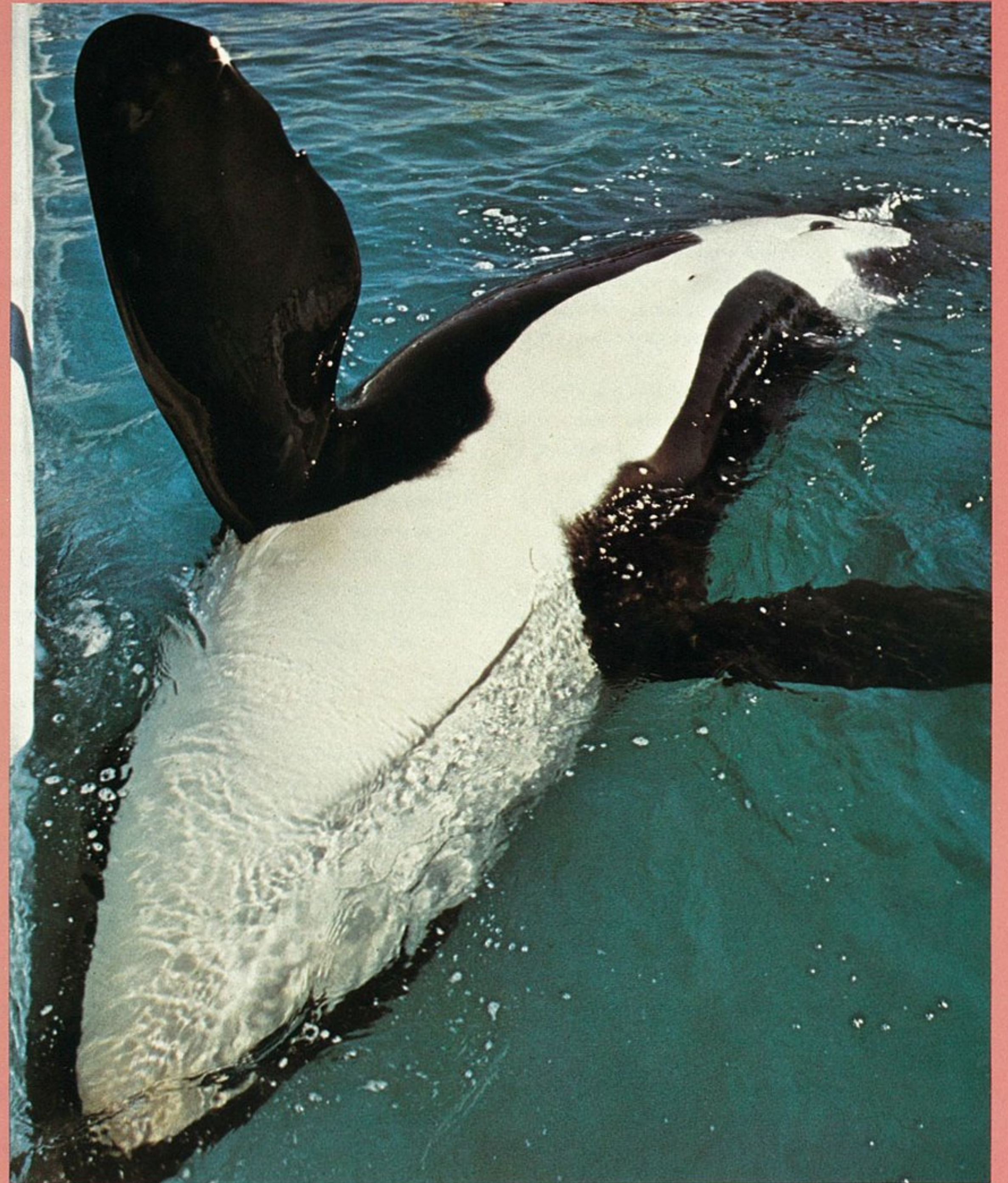
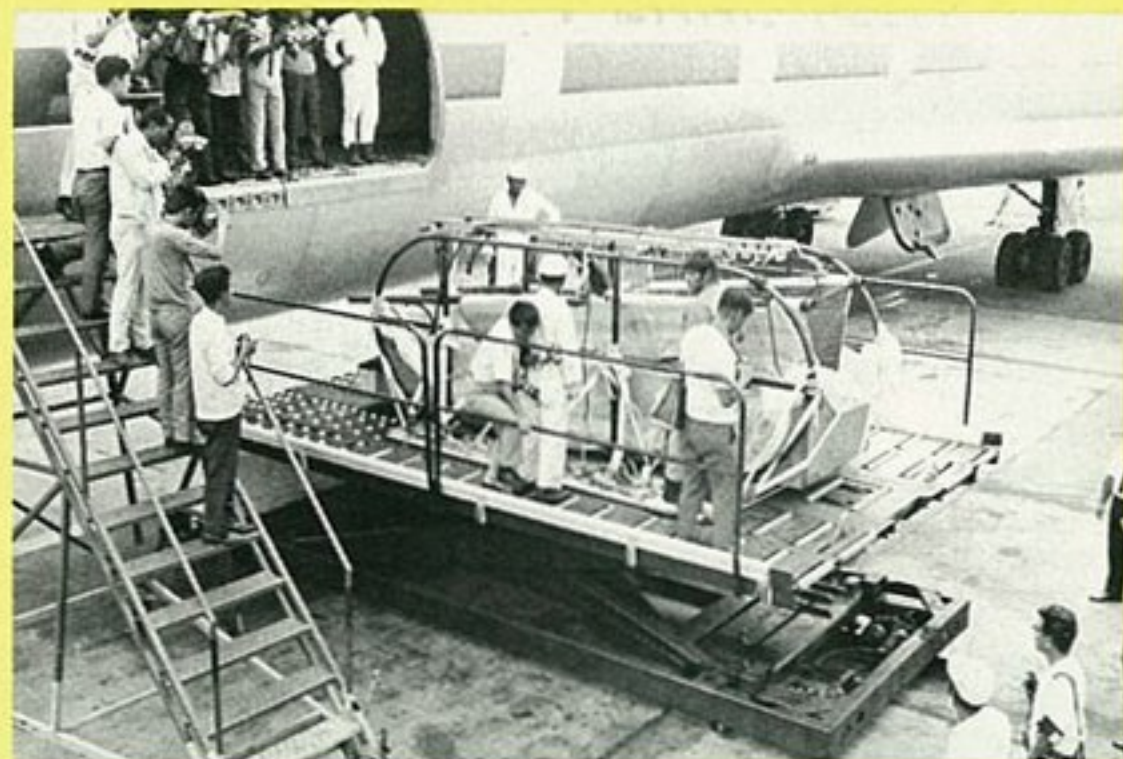
表紙説明

シャチの手羽

海に住む哺乳動物の胸鰭の中には、私達の手と同じように5本の指の骨が、きちんと並んでいるので、魚のように胸鰭とは呼ばずに、手羽と呼ばれています。そして、この手羽は主としてブレーキの役目をしているようです。シャチの手羽は、特に丸い形をしていて、その大きさも他のイルカの仲間よりも体に比べて大きくなっています。ですから、自然の海で、ものすごい速度で泳ぎまわっているシャチは、又急停止の名人ともいえるようです。

さかまた

生物の豆辞典　No. 5

ジェット機に乗って日本に到着

日本に初めて来たシャチ（ジャンボ君）

◎シャチの飼育の歴史

現在シャチは、世界中の水族館やマリンランドなどで20頭程飼育され、私達も見る機会が多くもてるようになりました。シャチが人間に飼育される前には、漁師や捕鯨にたずさわる人々、探検家や生物学者、船乗りといった一部の人々の間にしか知られていませんでした。ですから、シャチの習性などは実際に自分の目で確かめるわけにもいかず、それらの人々の報告を信ずるほかありませんでした。

シャチの獰猛性やその他私達を恐れさせるようなイメージはそれらの人々の口から聞き伝えられて来たわけですが、そんなシャチの話しも今だかつて、人間がおそわれてその餌食となった、という話はまったくみあたっていません。現在でもシャチについての詳細な事は、まだまだわかっていませんが、最近では飼育が開始されたことも1つの大きな理由となり、次第にそのかくれた生態が明らかになりつつあります。これは、動物園や水族館で動物を飼育する仕事が世の中に役立っている大きな例といえましょう。そこで、今回は、シャチが、いつ頃どういうわけで、飼育され始めたかについて、調べてみました。

シャチについては、現在でも一般の人々から、世界の動物の中で一番恐しい生き物だと思われていますが、そのシャチを飼育してみようという計画は、以前からありました。

1962年にアメリカの水族館でシャチを飼う計画を進めていましたが、なかなかそのチャンスに恵まれませんでした。ところが、1963年、今から11年前の事ですが、突然、　カリホルニア州のニューポートビーチの港に一頭の大きな雌のシャチが、潮に流されて辿り着きました。さっそくアメリカの海洋水族館の数館は、係員を送りこのシャチを捕獲しようと試みました。何んとか捕まえましたが、このシャチは、すでに病気にかかっていて、翌日には死んでしまいました。良いチャンスを逃したわけですが、その後も、まだ良く知られていないシャチを飼ってみようという試みや希望は、増々積極的になって行きました。実際にシャチが飼育されたのは、1年後の、1964年7月のことです。それには愉しろいエピソードがあります。

カナダの太平洋側のブリテッシュ・コロンビア沿岸にはたくさんシャチがいますが、あまり捕獲される事もなく又、調べられていませんでした。バンクーバー公立水族館では、シャチの複製標本を作るため、シャチを捕鯨砲を使って捕えました。初めは、殺して捕まえようとしたのですが、傷ついたシャチは、船に曳かれて元気に浜辺へ泳ぐ事が出来たので、良く観察して傷の状態を調べる為このシャチを飼ってみる事にしました。

シャチは「モビードール」と名付けられ、人に飼われた第1号のシャチとなったわけです。どうにか餌は食べるようになったのですが、捕えられた時の傷が元で85日間生存しましたが死んでしまいました。

飼育中は、このシャチは、雌だと信じられていましたが、若い雄だった事が死後わかりました。この時迄にはシャチの性別を背ビレの大きさや形で判別する事は、知られていましたが、　モビードールが、まだ若い雄であった為その特徴がはっきりしなかった為に誤ったものと思われます。

こうした経験から、シャチについての種々の事がわかって来ました。その中で、人間をおどろかせた事は、シャチが人に非常になれやすく又、自然海にいた時に見られる攻撃的な所が全くない事でした。

モビードールが死んで数ヶ月後に、カナダのナムーという小さな漁村で、サケの網に一頭のシャチがかかり捕えられました。

このシャチは、捕えられた場所の名を与えられ「ナムー」と呼ばれ、2番目に飼育されたシャチとなりました。ナムーはアメリカのシアトル水族館に運ばれて飼われましたが、到着後、餌を2週間程食べようとしませんでした。

飼育係員は大変心配してあれやこれやとナムーの餌を用意したそうです。まさか海にいた時の餌となっているアザラシやイルカを与えるわけにもいきません。そこで、魚肉や鯨肉をハンバーグのようにした餌を作って与えた事もありましたが、食べようともしませんでした。ナムーも空腹にはたえかねたのかとうとう2週間後に針金につるしたサケを食べ、その後は次第に他の魚も食べるようになりました。ところで、シャチにいったいどのくらいのエサを与えていいかまだわかりませんでした。海にいたシャチでは、いっぺんに170kgものエサを食べていた例もあって、どうしたら良いか迷ってしまいました。

結局イルカなどの給餌量を参考にして1日体重の3パーセントほどのエサを与えれば良い事もわかってきました。

このようなことが、一つづつ解決されて、ナムーの飼育は続けられました。このナムーは、映画にもなりました。

シャチが一般の人々の前で初めて頭の良さをひろうしたのは、1965年12月からアメリカのサンデェゴシーワールドで飼われていた「シャムー」という雌のシャチでした。

シャチの素晴しいショーを見た人々は、あまりのおどろきに声も出なかったほどであったそうです。その後、1967年までに7頭のシャチが捕獲され飼育されましたがこれらのシャチは、全て、アメリカやカナダの太平洋側のリアス式海岸の中にサケやニシンを追って迷い込んだものでした。

我国でシャチを初めて飼育したのは1969年9月5日、アメリカから特別機で空輸されて来た2頭のシャチでした。その2頭が今鴨川シーワールドで飼われている「ジャンボ」と「チャピー」です。

このように、シャチが飼育できるようになるまでには大変な苦労があったわけですが、しかし、シャチの飼育はまだまだこれからだといえましょう。

これからの私共の期待は、飼育しているシャチから子供が生まれ元気に育ってくれる事です。皆さまにも、是非元気な子シャチを見てもらいたいと思っています。

（長崎記）

トピックス

◎太りすぎたハシキンメ

魚には水槽に入れてすぐ餌を食べるものやなかなか食べないものなど色々といますが、300種類も飼っていると色々なことが起こります。深い所に棲み口の中が黒いハシキンメという魚は水槽に入れて一年近くも毎日棒の先についた餌とにらめっこしているだけで全く食べませんでした。ところが隣りの水槽にいたサケの仔があやまってハシキンメのいる水槽に飛び込むとすかさずサケをパクッと一呑みにしてしまいました。そこで生きたイワシを入れてみましたがサケを食べたようには食べません。色々と実験をしてみるとサケが飛び込んだ水音が食欲をおこした原因のように考えられはじめました。今まで魚が驚くからと餌を付けた棒をそっと魚に近づけたのがあわなかったようです。そこでアジの切身を水音をたてて与えたところ、今では、やせ衰え頭だけが目立っていた体が今度は太り過ぎて丸くなってしまいました。そこで美容と健康のため餌の量を減らされてしまいました。皆さん、食べすぎに注意をいたしましょう。

金銅記

太りすぎたハシキンメ

シーワールドのアニマル達

◎クラカケアザラシ

クラカケアザラシは、飼育下において他のアザラシと比較し大変神経質で、小心者であり、また単独行動が多く人間にも慣れにくい動物です。たとえばステージにいる時でも、人間が接近しようとすると真先にプールの中へ逃げ、また体に触れられたりすることを非常に嫌います。そのくせ餌を食べる時などは、係員の指までくわえてしまいそうな勢いでガツガツと食べます。こんな所から決して可愛気があるとはいえませんが、愛嬌のある顔付きには親しみを感じます。ここで他のアザラシには殆んどみられない摂氷行動を御紹介しましょう。彼等は一年を通じ氷を食べ、特に夏場は大小の氷塊を多量に摂ります。これは自然海で氷上生活をしているうち身につけた生活の知恵なのかも知れませんが、その正確な理由は分っておりません。このようなクラカケアザラシを当館では二頭飼育しておりますが、この事は世界に類のないことで、シーワールドの誇りともいえます。なおクラカケという名前は、雄では二才位から写真の様な馬の背にかける鞍の様な紋様が出ることに由来しています。

（大島記）

二才のクラカケアザラシ